

教育実習の報告

教育実習を迎えるまでに出来ること

国際言語・文化学科4年 恒吉 智美



はじめに

教育実習を楽しみにしている人、緊張している人、不安でいっぱいの人それぞれだと思う。私もこの時期

は不安でいっぱいであった。

ちょうど昨年の今頃、先輩方によるこの教育実習の報告会で話をうかがった。そこでようやく教育実習への準備のスイッチが入った。しかし、頭で考えるのは簡単で行動に移すことまではしなかった。その上、教育実習校であり母校である高校が私立ということもあり、高校在学時にお世話になった先生方もまだ多くいらっしゃる事が分かっていたため、どこか気持ちに余裕があったのだと思う。

授業の練習

第1回目の「事前の指導」において、模擬授業の実施希望調査が行われた。

私は昨年、実施を希望した。教育実習で一番必要なことは何かと考えたときに、まず頭に浮かんだことが授業の練習をすることだったからである。

私は3年生になって教職課程の履修を始めた。2年生までの私には教師になりたいという気持ちがあまりなかった。このため、学生生活も勉強面では墮落したものであった。しかし、友人達が教職の講義を受けていると聞いた時、私は「教師」という存在が遠いものではないことに気付いた。

私は中学・高校時代に一度は教師を志し、大学進学も本当は教師になりたいがために選んだ道だったからである。この気持ちを思い出したときに、3年生からでも履修は間に合うと先生からお聞きしたので履修をすることを決めた。

私は1年生の時からサークル活動やアルバイトをしている。どちらも私の大学生活にはなくてはならないものであった。だから教職課程を履修するからといって辞めるつもりはなかった。しかし、教育実習が近づき模擬授業をするにあたって、講義と模擬授業の準備、サークル活動とアルバイトの両立はとても大変であった。それでも、「自分で望んだ道だから、やるしかない」と気合を入れた。

模擬授業の会の委員から、日程などの連絡を受け、早速準備に入った。私は母校に教育実習の受け入れのお願いに行った時、高校国語の古典の授業をするように言われていた。高校在学時に利用していたノートを用いて、当時の先生はどのような授業をしていたのかを思い出しながら準備を進めた。

模擬授業は2011年の11月29日に実施した。私は予想以上に緊張していた。話す声、板書、授業展開、時間配分すべてがダメであった。終わってから泣きそうになったことを覚えている。しかし私は、これからも授業の練習をしていけば絶対自分の力になると確信した。

それから4年生になり、4月にもう1度模擬授業を行った。約1ヵ月半後には教育実習を控えていたため一層やる気が増した。他学科の先生や友人も参加してくださり、授業後の意見交換では良い点・悪い点をたくさん挙げていただいた。これらをしっかり見直し、私は教育実習に行くための準備を進めていくことができた。

実際にきちんとした形で授業の練習を行ったのは2回であったが、確かに実習を迎える前の不安は少なからず払拭できた。

練習の成果

私は6月11日から22日までの2週間、高校で教育実習を行った。授業の実践回数は14回であった。古文・漢文だけではなく、専門外の現代文の授業も組み込まれており、2週目の月曜日には古文の公開授業、最終日の金曜日には現代文の公開授業と、計2回の公開授業を行った。

迎えた1回目の古文の公開授業にはたくさんの先生方が観に来られ、本当に緊張した。それでもなんとか無事に終えることができた。放課後の反省会では、先生方から「まだ1週間しか経っていないのに大きな声ではきはきと話し、板書もしっかり書かれていて、とても驚いた」と高く評価していただいた。最終日に行われた2回目の現代文の公開授業も無事に終え、まだまだ勉強不足であることを痛感した。しかし、教育実習の一番の要といえる授業実践を、とても充実したものにすることが出来たともいえる。

あらかじめ授業の練習をしていて本当に良かったと思う。

おわりに

「十人十色」という言葉があるように、人前で話をするのが得意な人もいれば、それが苦手な人もいる。授業においても大きな声でテンポよく授業を進めることができれば、全く進められない人もいるだろう。しかし、教壇に立てば生徒はみなさんを「先生」として見ている。生徒に教える先生が何も話せない。授業が出来ない。これでは話にならない。

実習校の先生方はこれから教師を目指す教育実習生の皆さんに対して、最低限のことを求めていると思う。それが基本的な「人前で（大きな声で）話す」ことであり、また教科の「専門的知識」である。これらを少しでも克服して教育実習に行くためにはどうすれば良いか。それぞれで考えてみてほしい。

授業の練習をして、「大きな声を出す」「板書では字をしっかりと書く」など、基本的なことから始めてみることで構わないと思う。今、これから、どう動くかが大切だ。動いた分だけ教育実習で返ってくる。

教育実習を有意義なものにするための方法の1つとして、私はぜひ、「授業の練習」をおすすめする。

場面に応じた判断および指導

国際言語・文化学科4年 森 口 亮



はじめに

私は、2012年6月4日(月)から6月22日(金)まで、母校の中学校で教育実習を行ってきた。1年生1クラス、2年生1クラス、3年生2クラスで全校生徒が100名程度という非常に小さな学校であった。すべての先生方に非常に親切にいただき、無事に終えることができた。

授業は、英語を2年生において5回、3年生において2回の計7回、また道徳を2年生において1回行った。さらに、部活動にも関わらせていただいた。中学時代と同じ野球部に参加した。

生徒とのコミュニケーション

教育実習初日、全校生徒へのあいさつを済ませた私は、教室へと帰る廊下を歩きながら、生徒が話しかけてくるのを待っていた。しかし、こちらに寄って来る生徒はほとんどおらず、みな足早に教室へと帰って行った。

教育実習生なのだから生徒は興味を持って自然と寄ってくるだろうという甘い考えが私にあっ

た。恥ずかしくなったと同時に、思い返してみれば私の中学時代も決して進んで話しかける生徒が多くなかったことに気付いた。これを機に、形はどうであれ生徒の輪の中に進んで入って行こうという意識が芽生えた。

生徒との距離を縮めるのに大いに役立ったのが、予定帳の交換である。生徒が予定帳の下部にその日の出来事や関心事などを書き提出し、それに対し教師が一言コメントし翌日返却するというものである。学級担任の先生の発案で行われていた。実に様々な内容が書かれていた。毎日コメントをするのが楽しかった。

昔から恥ずかしがり屋が多く、面と向かって本音を語ってくれる生徒が少ない傾向にあるこの中学校でも、一対一で、しかも書くという手段でのコミュニケーションは驚くほど多くのことを語ってくれる。教育実習校の先生はそんなことをおっしゃっていた。まさにその通りで、時には紙面に収まりきれないほど書いてきてくれる生徒もいた。特に、趣味に関する話題が上ることが多かった。

「共通の趣味を持つことは多くの生徒の信頼感を生むきっかけになる」と先生はご自身の信条をおっしゃっていた。この言葉を参考に、私にとっては正直に言って分からない趣味ばかりであったものの、生徒がもつ興味・関心を貪欲に吸収していった。

そうした中で様々な悩み、特に人間関係に関する悩みを書く生徒が増えてきた。休み時間の活動や部活動などを通じて、ある程度関係が築けてきた教育実習期間の折り返し地点の頃である。

いかにして親しみを持ってもらえるか。それまでこのことのみを重視していた私は、先生としてどのように対応すべきかが分からなくなってしまい、考え込んでしまった。書くことだけでは限界がある。そう感じた私は、時間のかかりがちな指導案作成などの仕事を効率よく仕上げ、生徒個人ともっとじっくり話すことのできる時間を増やすことにした。実

際に話してみると、文字だけでは知り得なかった情報を数多くうかがい知る事が出来た。

教育実習生には、2もしくは3週間という他の先生方と比べて圧倒的に限られた時間しかない。できるだけ生徒と同じ体験を共有できるよう努力した方がよいと思う。

生徒指導主事の先生のお話

バレー部の顧問でもある生徒指導主事の先生のお話が印象に残った。

特に印象に残った言葉は、「元々人数が少なく他校から特に離れた地域にあるこの学校では、生徒同士、他校との競争意識が低くなりがちとなる。高校・大学と進むにつれて周囲との差異についていけなくなる可能性が出てくるので、生徒指導の一環としてその向上に力を入れている」という言葉である。

非行・暴力への指導や、服装・言葉の乱れの改善を生徒指導の主な役割と漠然と捉えていた私は、そのような生徒指導もあるのだと気付かされた。一つ一つの問題への対処ではなく、生徒をより良い方向へ導くことが生徒指導の本質であることを再確認した。学校内外での実に様々なことに対し、生徒指導は十分な役割を果たしていく必要がある。そう思えた言葉であった。

おわりに

これまでに経験したことのない程いろんなことが詰まった3週間であった。生徒ともっと時間を共に過ごしたいと思った矢先に教育実習が終わってしまった。非常に残念であった。

分からないことだらけで、教室を移動するだけで新たな問題が見えてきた気もしたが、試行錯誤のうちに自信がついたこともあったし、ちっぽけながら教職に携わる存在であるという自覚が湧いてきたこともあった。そして何より、生徒との関わりの中で新しい発見をすることが有意義であった。

教育実習は、間違いなく皆さん方の教職に対する考えに大きな影響を与えると思う。教育実習まで出来ることをみなさんなりに考え、出来るだけ完全な準備をして臨んでほしい。

特別な支援が必要な生徒から 学んだこと

史学・文化財学科4年 児玉尚子



はじめに

私は、母校で3週間の教育実習を行った。担当学級は、2年C組(26名)で、朝と帰りのHR、昼食、清掃などを行った。教育実習校が、高等学校であったことから、教科は、「地理・歴史」、科目は「日本史B」を担当し、授業は、担当学級である2年C組、ならびにD組(18名)の2クラスを受け持ち、10回の授業実践をした。その他、LHについては2回授業を行った。

教育実習中、先生方からよく言われたことは、「生徒ともっと関わりなさい」、「授業中の様子だけでなく、部活動や休み時間の活動を見なさい」というものだった。

指導案作成や授業づくりに一生懸命だった私にとって、生徒と関わる時間を作るのは容易なことではなかったが、教育活動全般を行ううちに、生徒と関わることの大切さに気付かされた。

生徒指導の捉え方

「生徒指導は、子どもに一番近いところで対等に接することができるものだ。」

「生徒の愚痴に耳を傾けることから始まる。」

これらは、生徒指導担当の先生の言葉である。

私にとっては、「生徒指導=怒られること」であったが、この言葉は、その様なイメージからは程遠いものだと感じた。教師と生徒とが、理解しあえる関係づくりのためには、この考え方が重要ではないかと思った。

教育実習校では、問題発生後の対処である消極的指導よりも、普段から生徒と関わり、問題発生の防止を心がけた積極的指導が行われており、問題を抱える生徒と学校側が向き合う体制ができていた。

また、問題が起きた際には、ただ単に叱るのではなく、なぜそのようなことをしたのかを生徒に聞いたり、何がダメなのかを説明し指導をするようにしていた。

生徒との関わり

担当学級は、大人しい生徒、積極的で話すことが好きな生徒、やる気のない生徒と様々なタイプの子どもたちがおり、個性豊かなクラスであった。担当学級での生徒との関わり、生徒指導については本当に悩み、迷い、担任の先生にたくさん相談した。

生徒と関わっていく中で、私にとって何よりも忘れられないことがある。それは、特別な支援が必要な生徒との接し方である。

教育実習校には、様々な困難(障がい)を抱える生徒がおり、特別支援教育のコーディネーターが授業観察を行い、学校側とこれからの対処について話し合いが行われていた。

私の担当のクラスにも、特別な支援が必要な生徒が在籍していた。事前のオリエンテーションで、クラスや生徒の状況について知らされてはいたが、どのように生徒に関わればいいのか迷い、最初はなかなか関わりを持てなかった。

朝や帰りのHRや授業の時など、どのように説明したら言いたいことが伝わるのだろうか、分かりやすい説明とはどんなものだろうか悩んでい

た。実際に試して失敗し、また考えなおせばいいものを、考えるばかりでなかなか動く事ができない。そのため、担任の教師からは、「先生が考えて焦らずに伝えたいことを明確にし、やりたいようにやってみればいいのではないか」と言われ、生徒と向き合って考えることが大事なのだと気付いた。

いくら悩んでいても、生徒と関わらなければ、状況は分からないし、問題解決にはつながらない。そのため、昼食を生徒と共にとり、話をするようにした。これにより、授業中以外の生徒の様子が分かり、実は積極的に話しかけてくれる子だったのだとか、授業中は寝てばかりではあるが休み時間になると元気いっぱい騒ぐのだなどか思ったりし、生徒の新たな一面に出会えた。そして、一人ひとりに対して、その生徒の反応に合わせた対応をとる必要があるのではないかと思った。

それ以降、生徒と向き合う中で様々な工夫を試してみた。例えば、難聴の生徒に対しては、文字に書いて説明したり、ゆっくり大きな声で話したり、身振り手振りを加えて伝えるようにしたり、注目してほしい時には机を叩いて注意を向けたりした。

これは、介護等体験実習で聾学校の生徒と接した時に学んだことを応用したものである。また、なかなか前を見て話に集中できない生徒に対しては、指さし確認をし、授業中には、模造紙を貼り、黒板をカラフルにすることで、なるべく前を見てもらうという工夫をした。

教育実習校にいらっちゃったカウンセラーの先生からは「模造紙などを貼ることは、ユニバーサルデザインの授業であり、視覚的に捉える子どもが増えている今、効果的である。誰にでも分かるということは、とても大事なこと」ということを言われた。

何かを分かりやすく伝える、理解してもらうということは、簡単なことではない。困難を抱えていない生徒に対して、それを行う時にも難しさを感じ悩むと思う。それが、特別な支援が必要な生

徒と向き合う時にはなおさらである。しかし、生徒の話を聞いたり、観察し、生徒を理解することで、生徒側は、話を聴こう、分かろうとしてくれるのだと思う。

おわりに

私が、教育実習を通し学んだことは、生徒理解が何よりも重要ということである。生徒の心を一生懸命ノックし続けても、生徒の側が、先生は自分たちのことを分かってくれないと思っていれば心は開かれず、伝わらない。生徒が話を聞こうとしても、教師が生徒を理解していなければ、一人ひとりの心に届く話ができるはずがない。

一人でも多くの生徒と話すことと観察することが重要であり、その話の中から、会話の糸口や生徒を知る小さなきっかけを見つける。そして、それを見逃さずに、生徒と接してみることが生徒指導のはじまりではないだろうか。

教育実習は、生徒や教員との関わりから多くのことを学ぶことのできる時間である。やりたいことを存分にやり、悔いのない充実したものにしてほしいと思う。

授業の準備・計画

国際言語・文化学科4年 久保田 由 佳



はじめに

私は、母校の高校で2週間実習をさせていただいた。教科は芸術の美術である。後半の1週間の授業を全て任せて頂き、「授業を行うということ」に向き合い、考えを深める貴重な時間を過ごせたことに感謝している。

授業観察

指導の先生にも勧められ私自身も積極的に行ったことの一つが、「授業観察」である。

私は、他の教科の授業観察も多く行った。教育現場で授業を重ね経験を積んだ先生のテクニックはもちろん、実際に教える対象となる生徒達との関わり方などを注意深く観察する。その後で、授業を行った先生から「どのようなことに気をつけているか」や、その他アドバイスなどを受ける時間を設けて頂いた。授業観察を行い客観的に授業に触れておくことで、より良い授業のために準備・計画すべきことが明確になると感じた。

ここでの私の反省点は、授業観察の際には「生徒の視点になりすぎない」ことであった。生徒の視点で見るとは大切だが、授業の工夫の殆どはその流れの中に隠されている。良いと感じる授業ほど、生徒が無意識のうちに授業へ引き込まれるように作られている。したがって、授業観察者も生徒の視点でいると、いつの間にか授業に夢中になり、肝心の授業者の工夫がどこにあったのかが見つけられないまま授業が終わってしまうということがある。

「授業観察」を行う際には、「どんな点に注目したいか」「どんな技を盗みたいか」など、あらかじめ「授業観察を行う目的」を明確にしておく、その機会を無駄にすることなく私たちの授業に繋げることが出来ると考える。

複合的な教材研究

授業を行う上で必要なものが、教科書や参考書などの教材である。これら教材を上手く使うために、教材研究は不可欠である。

美術は特に、教材の取り上げ方が重要になる。わかりやすく、生徒が納得出来る副教材を探すことも重要である。研究授業の題材は、教育実習二日目に初めて知らされた。突然告げられたこともあり、参考作品など副教材を探す手立てに困った。

授業までの準備期間は3日しかなかった。インターネットで探すのが一番幅広く早い。しかし実家にはネット環境がなく、学校でもインターネットが出来るパソコンは限られていた。参考になる書籍も少なかった。

教材を探すことが難しい中立ち返ったのが、教科書であった。実技が多い授業ではどうしても、教科書は使われる場面が少なくなりがちである。しかし、どの教科でも基盤となることが教科書にはしっかり盛り込まれている。私はこの教科書に大いに助けられ、授業の流れの軸を作ることができた。教科指導の先生にも、「美術で教科書を使うことは特に少なくなりがちだが、活用することは大切なことである」と言って頂けた。

副教材となる参考作品を探すのは最も苦勞した。しかし、軸を決めることが出来ていたので選びぬくことが出来た。授業の内容をあらかじめしっかりと作り上げ、何を伝えたいのかを明確にしておく。基盤とする教材を決めたうえで、「流れの中で要点を印象付け納得させる事のできる資料」であるかどうかを念頭に置き探すことで、効果的な副教材を選ぶことができると考える。インパクトや題材そのものの奇抜さだけを理由に取り入れると、そこだけが悪目立ちしてしまうという失敗に繋がる。何を中心にして、どこをわかりやすくするために何を追加するのか。教材を上手く使うためには、それぞれの教材の目的をしっかりと把握しておくことが大切だと考える。教材の目的が明確になっていれば、良い参考資料も選出しやすくなる。準備した教材に納得して取り組むことが出来ると、生徒への指示もスムーズになると感じた。

おわりに

私が教育実習中に最も肌で感じたことは、生徒の前に立つ責任であった。はじめ、私は生徒の前に立つ時、生徒の方をしっかりと見ることができなかった。うまくやろうとすると独りよがりになり、

かえって生徒を無視して展開していることに気づいた。自分の行うことに自信がなければ、上手く向き合えない。

不思議なことに、教壇に立ち生徒の顔をゆっくり見ることが出来るようになってきた時から、それまでの焦りや不安が少しずつ和らいでいった。そう感じた時、自分自身を信じること、そして何より、生徒を信じる事が授業を行う上で大切なことだと私は気づかされた。

自信を持つためには、その時の最大の努力で臨まなければならない。そのために、これまでに述べてきたような準備・計画を行いたい。「授業を行うということ」は、「教えている」という驕りでもなければ「教えなければならない」という観念に縛られたものでもなく、常に生徒との信頼関係を大切にすることだと、この教育実習が私に教えてくれた。授業の準備・計画の努力は生徒への思いの大きさだと私は思う。これから教育実習に臨まれる皆さんが、実りある授業を行えることを願う。

授業をつくる

国際言語・文化学科4年 丸山博之



はじめに

「さっきの授業、はっきりに言って0点だったよ。」

教育実習の現場で実際に言われた言葉である。私は母校の中学校で3週間の教育実習を行った。担当学年は2年生で、教科は国語科である。1週目は授業観察を行い、2週目から授業実践を計31回行った。

失敗から学ぶ授業

教育実習では様々なことを経験する。生徒とのふれあいや学校生活の指導、先生方が行う雑務なども経験した。しかし、私は教育実習先では「まず、なによりも授業が大事である」ということを叩き込まれた。この言葉を聞いて、「たしかに、先生の性格や人柄が良くても授業がイマイチだと良くないなあ」と思った。

実際に授業を行ってみると常に失敗の連続であった。時間配分が分らず、時間をオーバーしたり、生徒の質問に反応することが出来なかったり、興味が無くて授業中うつむいている生徒もいた。教育実習では担当の先生は教室の中に入らず、廊下で私が授業しているのを観察するというスタイルであった。授業が終わった後には悪かった点や、改善した方がよい点など多くの指導を受けた。その中の一つに「発問の内容をより具体的にするように」というものがあった。抽象的で曖昧な発問だと生徒が理解しにくい。発問の内容が具体的に出来るようになるように心がけることでわかりやすい授業を行うことが出来るようになる。

指導を受ける中で、厳しい言葉も多くもらう。冒頭の言葉もその一つである。そうした厳しい言葉を言われるたびに、胃が痛くなるような気持ちになる。それでも、教育実習が終わり、振り返ってみると、厳しく言ってくれる人で良かったと思えるようになった。

教育実習では本職の先生方と同じように授業をしなければならない。しかし、私達には圧倒的に経験が足りないのも事実である。先生方は「上手くいなくても仕方ない」と言ってくれる。それに甘えて内容の薄い授業をするわけにはいかない。経験が足りないかもしれない。それでも、今の私たちなりの全力で授業を行わなければならない。

私が教育実習中に助けられたのは同期の教育実習生の存在であった。教育実習中は私ともう一人の教育実習生がいた。私の教科は国語で、彼の教

科は数学であった。授業の構成や指導案を作る際に悩んでいたら、他の教科にも関わらず「ここはこうすればいい、こうすればわかりやすくなる」と相談に乗ってくれた。授業以外にも、生徒との関わり方や、書類の文面のチェックなど多く支えてもらった。もちろん、現場の先生方に相談するという手もある。教育実習先での授業はわからないことだらけだ。それでも一人で悩まず、多くの人の力を借りることが重要である。

教科で身につく力

授業実践を繰り返す中で、様々な指導を頂いた。その中で「丸山先生は授業を通して生徒にどんな力をつけさせたいか」と問われ、教育実習中ずっと悩むことになった。

学習指導要領や学習指導例に従って漫然と授業を行うことは誰にでも出来る。教科書に書いてあることをただ教えるだけでは生徒に力は付かない。私は国語という教科で「生徒に国語の力が身についた」と言えるにはどうすればいいかをずっと悩んでいた。

授業では文学作品を扱った。この文学作品を扱った授業が終わったときに、生徒はこの文学作品を学んだことにより、どんな力が身についたか、さらに身についた力を次にどう活かせるか。こうしたことを考えて授業づくりをしなければならない。自分の中で常に「これが出来れば力がついたといえる」内容を模索していかなければならない。「この単元を授業した」ということではなく、「この単元で授業したことで、生徒にこんな力が身についた」と胸を張っていえるようになりたい。これは全ての教科に言えることだ。

教育実習の現場では、たとえ教育実習生といえども生徒の成長に責任を持たなければならない。

さいごに

終わりに、もう一度「なによりも授業が大事」

ということについて語っておく。

この言葉を最初に聞いた時は「他が駄目でも授業さえしっかりしていれば問題ない」という風に考えていた。教育実習を終えて改めて感じたことは、授業こそが教師としての集大成であるということだ。

生徒と触れ合う中で、個人の生徒についての理解を深める。日頃の集団生活の中での規律ある生活を行う。生徒との信頼関係を深める。そういった授業以外の学校生活で培った力があってこそ、授業は成り立つのである。生徒は先生をよく見ている。授業以外でも、生徒と話し、よく観察する。その上で培われた信頼関係が授業という場で活かされるのである。

教育実習の最後の授業が終わって言われた。

「さっきの授業は0点だったよ。」

「それでも生徒がついてきてくれたのは、生徒が先生のために頑張ろうって思ったからついてきたんだよ。」

教育実習中の授業は確かに大変だ。慣れない環境で戸惑うことも多い。それでも自分が今出せる全力で生徒と授業内容にぶつかっていくことで、少しでも納得する授業ができるはずだ。

先生方から学んだこと

史学・文化財学科4年 江口悦正



はじめに

私は、福岡の母校の中学校で3週間教育実習を行った。2年生の2クラスの社会を担当させていただいた。教育実習中、主に私に指導してくださった先生方は、教科担当が2名と配属されたクラスの担

任の先生の計3名の先生方であった。授業実践回数は11回であった。それほど多くないが、多くの先生方との関わりで、たくさんの事を指導していただいた。このため、先生方の職員室での姿や授業中の姿、部活での姿など様々な教員としての姿を見ることが出来た。とても勉強になった。

教科活動での先生方との関わり

2名の教科担当の先生はそれぞれ社会科を受け持たれている先生で、長年教師を続けられているベテランの先生と、非常勤講師をされている別府大学出身の先生だった。主に、本学出身の非常勤講師の先生に指導をしていただいた。私の考えとは違う視点をもって多くの意見や経験談を聞くこともできた。

教育実習が始まる前の打ち合わせの時から、「あなたが大学で学んだことや、自分が考えている授業を今やっている学校の授業と異なってもいいから色々チャレンジしてみてね」と言っていたものの、私としてはこの言葉がとてもプレッシャーに感じた。しかし、私としては、「やれるだけやってやる」という気持ちにもなった。

実際に教育実習が始まりはじめての1週間は授業を参観した。教育実習2週目から授業を行った。1回目の授業では、授業の形にはなっていたが、なかなか生徒の興味を引くことが出来なかった。生徒ではなく私がただ授業内容を話しているだけで思い通りの授業ではなかった。

非常勤講師の先生から「はじめは、こんなもんだよ。授業の形にはなっていたから十分だよ」と言っていたときとても救われた。

その後、何度も授業を繰り返すたびに気付いた点を言っていた。いつも放課後の授業準備に遅くまで付き合っていたとき、たくさんのアイデアや助言をいただいた。準備を行っているときに「僕が言っていることは、あくまでも参考にしてもらいたいから、全部取り入れなくてあな

たの授業スタイルを良くするための参考にしてね」と言われ、そのおかげで私自身の授業スタイルというものを確立していくことができた。授業に関する疑問や意見は、非常勤講師の先生にほとんど聞いてもらい、本学の先輩でもあったので話やすかった。

一方、ベテランの先生は、2週目から授業を見ていただき、査定授業の際は指導案や授業内容など多くのことに助言や指導をしていただいた。ベテランの先生は、「授業は人それぞれの形があるから、導入と展開は人それぞれ違っていいし、100人先生がいたら100通りの授業があってもいいと思う。ただ、どんな授業でも課題とまとめ(授業のゴール)はみんな一緒になればいい。自信を持って」と言ってくれた。私は、このベテランの先生の言葉が今となっては、教訓となっている。

教科外活動での先生方との関わり

授業の空き時間を利用してたくさんの先生方に講話を行っていただいた。

教頭先生からは実習の目的と留意点、教育実習生の心得などの話を伺った。その他、同和・人権教育、実習計画・教科指導、生徒指導、道德・特別活動、学校経営全般など計6回の講話を各担当の先生方に行っていた。

その中でも、一番印象に残ったのは、生徒指導である。生徒指導の先生は「生徒指導は個人であるものではなくて職員集団で行うもので、『何時でも』、『どこでも』、『誰でも』であって、共通理解をもって、共同実践していくことが大切だよ」と教えていただいた。自分勝手に指導するのではなく、学校で決められたことを統一レベルで行っていくことが大切だということを学んだ。

その他にも、私の母校では、授業が行われている時間帯に授業のない先生方は教室を見回ることになっていた。私も先生方と見回りを行った。その時に話した雑談がとてもためになった。その

際、ある先生からは、「どんなことをするときも職員が一丸となって学年問わず指導していくことが大切だよ。そのためには、生徒を理解し、人間関係をつくることが教師同士でも大事」ということを教えていただいた。

また、先生方が生徒と真正面からぶつかって、逃げることなく生徒と向き合っている姿を見て私自身も見習うことが多かった。是非ともこのような先生方のようになりたいと感じた。

終わりに

この教育実習で、先生方の働いている姿や指導の方法など様々なことを学んだ。教師からの目線で生徒を見ると普段では見ることのできない光景を見ることが出来た。

教育実習生としてなかなか先生方に質問したり、意見を聞いたりするのは、勇気があることだと思う。しかし、一歩踏み出して先生方に聞いてみると、多くの意見をいただけたり、普段なかなかできない話ができたりするなど、私のためになることばかりである。積極的に実習に参加することが大切だと考える。

私自身、教師になりたくてこの別府大学に進学した。教育実習を終えてからますます教師になりたいと思うようになった。まだまだ勉強不足であり、知識も十分とは言えないが、教師になりたい気持ちは本物である。

教育実習を来年に控えているみなさん、「教育実習生だから」という遠慮の考えを持つのではなく、「教育実習生だからこそ思い切ってやる」という気持ちで臨んでください。そうすれば、教職員の方々も答えてくれると思う。頑張ってください。

生徒の心に寄り添う

国際言語・文化学科4年 安部詩織



はじめに

「教師になりたい」と思って別府大学に入学した。教育実習に行き、さらに「生徒の心に寄り添うこと

のできる教師になりたい」と思うようになった。教育実習に行けば私たち教育実習生は生徒から「先生」と呼ばれる立場となる。そんなプレッシャーや不安が胸の奥に渦巻くなか、教育実習中は生徒とより多く接し、その接したことを授業での支援に生かすということを目標とした。

生徒に発する第一声

教育実習に行かせていただいたのは、母校の中学校であった。校舎の改築がされており、私が通学していた当時とは少々様変わりしていた。「母校に行かせていただく」ということは生徒との大きな接点でもある。母校であることが生徒と話すきっかけともなった。担当の学級であった生徒とは朝の短学活までの時間や、給食の時間や昼休みを使って接していった。また、合唱部の指導にも関わらせていただき、他学年との関わりを持つこともできた。

生徒に発する第一声は、挨拶である。生徒が教室に入ってくる前に教室に行き、教室の整備をしながら生徒を待つ。生徒が入ってきたら、挨拶をする。声量や声のトーンを考えながら声を掛けることの大切さを知ることができた。また、挨拶をしながら「今日の調子はどうですか」とか「すごい、宿題満点だね」と話しかけることで、生徒との関係を築くことができた。これは大学の授業で教えていただいていたことで、「挨拶ってすごい」

と感じた。挨拶をし、生徒に声をかけることで、生徒も「この先生は話しやすい」という印象を持ったようである。給食の時間や昼休みでもよく話しかけてくれるようになった。

答えを出すのは誰か

配属されたのは1年1組で、授業は1年生の国語を担当した。また担当の先生のご配慮により、朝と帰りの短学活や学級活動、道徳の時間なども観察したり実践をしたりした。

国語の授業で実践したのはスピーチの授業である。「話す」という活動は学習指導要領のなかでも注目されている項目である。クラスの前で「話す」ということが得意な子もいれば、不得意な子もいる。あらかじめ用意する原稿を「書く」ことが苦手な子だっただくさんいる。そんな生徒に対して、どんな支援が必要なのかを考えなければならない。そうした中で、私にとって最も回答が難しかったのは「何を書けばいいのかが、わからない」という生徒からの質問であった。確かに、「書く」ことが苦手な子がいるということは教育法などの授業で知っていたし、わかっていた。しかし、所詮「つもり」に過ぎなかった。

「私の宝物」というスピーチ原稿を書く授業であった。それぞれ生徒自身の宝物についてのエピソードをまず書き、次の授業で発表するという計画であった。ほとんどの生徒がたくさんの宝物を書き出しているなか、全く手が進まない生徒がいた。私はその生徒に「何か宝物は思いつかないの」と聞いた。すると、「私には宝物なんてない」「友達とか家族とかありきたり。そんなのキレイゴトじゃん」と、すぐさま返答があった。そんな言葉が私に突き刺さった。中学生は、私たちが想像するよりはるかに複雑な心境を抱いている。中学生という時期は心が揺れ、いろんなことに敏感になる。言葉一つで傷付き、些細な仕草で人を信用できなくなるような繊細さを持ち合わせている。

宝物を探すためには自分と向き合わなければならない。中学生だからこそ書いてほしい内容であった。私は先の生徒に「誕生日に貰ったもので大切にしているものはあるかな」、「好きなことや趣味はなにかな。そこから考えてみようよ」と、問いかけた。

答えを出すのは教師ではない。辿り着いてほしい目標までにそっと力を添えること、支援が大切となってくるのだ。

先生方から学ぶ

母校には今年度から、別府大学の卒業生が勤務されていた。同じ1年生を担当されていたので、教育実習中はいろんな話を伺うことが多かった。また、弟が在学していたので先生方にはよく声を掛けて励ましていただいた。

教育実習中、ほとんどの教科の授業を観察させていただいた。はじめは担当の先生の国語や学級活動を、その後だんだん同じ学年の他の国語の先生の授業や、他にも数学、社会、理科、英語、体育、技術、家庭科なども観察した。できるだけ担当のクラスの授業を観察し、生徒と同じ時間を過ごすように心掛けながら、他の教科の良い所を吸収していこうと思った。

本学の卒業生の先生は理科を担当していた。その先生の授業を観察し、最も感動したのは生徒の興味の惹き出し方であった。理科室での授業だった。ただ生徒の前で理科の準備やちょっとした実験をしているだけで、生徒は先生の周りに集まってきた。それぞれの教科にはそれぞれの特徴があり、特徴を生かした適切な導入を行うことで生徒の心を掴み、授業へと参加する意欲をより促すことができる。私にもこんなに楽しい導入を用いて授業ができれば、と思った。

教育実習を控えたみなさんへ

教育実習はゴールではない。やっとスタート地

点に立てたのだな、という実感である。教育実習を終えても、所属している書道研究室では模擬授業を行い、指導をしていただいたり、友達との話の中でも授業に関するいろんな話をする。教育実習は教師としてのスタート地点で、みなさん方は今そのためのウォーミングアップをする時期をいよいよ迎えているのだと思う。

教育実習中、担当の先生と「先生」という仕事についてたくさん話をするのができた。その中で心に残っているものをひとつ紹介する。

「心が揺れ動く中学生という時期に、少しでも寄り添うことができ、少しでも支えられたら、という気持ちで私は日々過ごしています。」

生徒がなにか事件を起こして、教師が助けて「先生すごい」と言われるような出来事なんて無いに等しい。テレビや本などによれば、そのような生徒指導が多いように思われる。しかし、実際には滅多に起こらない。私たちが出来ることなんて微々たるものである。

教育実習中では、教育実習生に自ら話しかけてくる生徒も、全く話しかけてこない生徒もいる。その双方の生徒の心に、「少しでも寄り添えたら。」生徒の心を、「少しでも支えられたら。」教育実習を経て、これから教師を目指す上での大きな課題を発見することができた。

ただ過ごすための教育実習ではなく、何か掴んで、食べて咀嚼して飲み込んで、最後には吸収して自分のものにして帰ろう。そんな気持ちで実習に臨んでほしい。授業が成功することが目的ではなく、失敗してから、如何に前向きに取り組むことができるか。教育実習のキーポイントはここにあるのではないだろうか。

支援の大切さ

国際言語・文化学科4年 山下 桃佳



体験と新たな発見

平成24年6月4日から16日の2週間、夢に向かっての第一歩でもある教育実習に行かせていただきました。実習の中で、様々な活動に参加し、生徒の皆さん方のおかげで、たくさんの発見や新しい経験をさせてもらいました。大学生活の中で日々学習し、ご指導いただいた先生方や書道研究室で学ばせてもらったこと、指導案の書き方や授業の組み立て方、支援の大切さ等の内容を、学校現場で自ら体験することができました。特に細かく荒金大琳先生に指導してもらった、「生徒観」「指導観」「教材観」の大切さを改めて痛感することが出来ました。

担当させていただいたクラスの生徒との毎日の掃除の中で、掃除をする手が止まる生徒も中にはいました。それを見逃すのではなく、声かけをしてはじめをつけるように心がけました。又、やみくもに声かけをするのではなく、自らが活動する中での無言の訴えなども効果的であることを学びました。期間中に体育大会があり、スムーズな誘導ができるよう声かけを行うなど、とても貴重な体験も多くありました。生徒から悩みを相談された時は、答えを出すのではなく、話を聞くことに徹しました。生徒自身の中で答えを出すように努めました。

授業の「驚き」

高校芸術科書道を担当したことによって、異なったクラスの雰囲気を感じる事ができました。授業を体験していく中で、同じ授業内容をし

ているのに、クラスによって流れもスピードも全く異なり、「生徒観」を肌で感じることができました。教科担当の先生からは、事前に細かな指導をしていただきました。授業の中では極力大きな声を出すことに徹しました。先生から「失敗をするのは当たり前。反省を行ない、次にどう生かすことができるかの方が、もっと大事」という言葉をいただき、反省した内容を実施できるように心がけました。

大学の授業で学んだ「驚き」の表現を感動へと繋げ、それが学ぶ楽しさにつながっていました。高校でも同じように、評価の観点の1つ1つに「驚き」を持てるように努めました。体を使い表現し説明を行なうことなどの実践を指導案にも生かすことができました。その結果、私自身新しい「驚き」を表現し、感じることができました。

机間支援の中で、大切なことは何回でも生徒に伝えること、1人の生徒から出た質問は大きな声で全体にも説明すること、声に強弱を付けること等の、細かなことに気をつけました。生徒への声かけは、思っていた以上に生徒にとっては心に残るものなのかなと、生徒の授業の感想を見ていく中で、実感しました。何気ない一言に、生徒は驚き、感動し喜び頑張ろうと思ってくれることがわかり、嬉しかったです。ほんの少しでも、教師が生徒1人ずつのことを考える時間が大事であることを、実習の中で日々実感できました。実際に生徒と接することや、授業ができることはとても貴重な体験でした。

更に、実践を通しては、5分前指導の大切さを、身をもって学ぶことができました。芸術教科は、主要5科目の教科に負けない授業展開が求められます。そのために授業での教員の「5分前行動」は、重要なポイントとなります。用具の準備と同時に、授業の導入を含めたコミュニケーションを図ると、スムーズな授業展開へとつながっていくと思います。

おわりに

教師という仕事は、本当に大変だと思いますが、やりがいのある仕事ではないかと強く感じました。その多くが、生徒の笑顔からくるもので、実習中にもたくさん助けられたと感じています。そして、大学で学んだ多くのことが、現場で困ったときに解決へと導いてくれました。教育実習を終え、私は改めて教師になりたいという気持ちが強くなりました。書道の学習を通し、生徒が1つ1つの授業において「驚き」を感じるにより、「楽しかったな」という気持ちにつながり、生涯の学習へと発展できたらと思います。そのためにも教育実習での体験、大学生活での学習を生かせるように、これからも日々努力していきたいと思っています。

